

**P-21****健康サポート薬局****地域健康サロンで薬剤師会の行う健康講座と  
薬剤師会が開催する健康サポートサロン**○<sup>なかに なおき</sup>仲谷 尚紀, 石田 千賀子, 東 周子, 岡田 恵実

大和郡山市薬剤師会

【目的】平成28年4月より介護保険で総合事業が大和郡山市でスタートしました。

総合事業の実施に伴い、従来から地域で開催されていた地域サロン活動に行政が今まで以上に関わることになりました。大和郡山市の地域包括支援センターが地域サロンの育成、立ち上げにかかわっています。

総合事業の実施にあわせ、本会会員の地域での健康講座を多くし、住民の健康サポートに貢献出来たか検討します。

【方法】総合事業にあわせて地域包括支援センターの活動エリアごとの地域サロンにかかわりを持つようになりました。本会では、従前より地域活動で健康講座に講師を派遣しています。本年度は総合事業にあわせ薬局も地域包括支援センターのエリアごとにグループを作り講師派遣を行うことにしました。サロンは地域の住民が集い、語らいの場として利用し、時には健康づくり、健康教育の場としても利用しています。

本会は、本年度よりサロンへの出張健康講座を始めています。平成28年度は15回を計画しています。さらに包括支援センター区域ごとに本会主催の「健康サポートサロン」をほぼ毎月開催しています。

健康サポートサロン開催後に参加者に健康講座についてアンケートをとっています。薬局がサロンへのかかわりを多くすることが、住民の健康づくりに役立つアンケートを集計し報告します。

【結果】普段ではなかなか聞けないことを詳しく聞くことができたので満足しているなどほとんどの住民から満足しているとアンケート結果をいただきました。

【考察】薬剤師会が地域にむけてサロンをひらくことで、地域住民の自助、互助に貢献し、地域包括ケアシステムの中に組み込まれている総合事業を進めたい行政との連携する準備が整ったといえる。

**P-22****医療安全****インシデントを標語に、注意喚起への定着化へ**○<sup>こたま なおき</sup>児玉 直紀<sup>1)</sup>, 山崎 千絵<sup>2)</sup><sup>1)</sup>株式会社第一薬局 和佐, <sup>2)</sup>株式会社第一薬局 小雑賀

【目的】永遠の課題である「安全管理」をテーマに、社員（薬剤師、事務員に対し）標語を募集。

[※標語とは、言いたいことを簡潔にまとめた短文のこと。つまり、スローガンを短縮したキャッチフレーズのようなもの。交通安全標語が最もよく知られており「狭い日本そんなに急いでどこへ行く」「飛び出す車は急にとまれない」など傑作が生まれている]

目的は ①良い作品を注意喚起のモデルケースにし、注意喚起の定着化を狙う ②自身のインシデントを考慮することで、意識の再確認を狙う ③他の作品を見ることで意識の違いを知り、より良い注意喚起を学ぶ。

【方法】3か月の応募期間を設け、1名最低1作品は提出するように案内。

優秀作品の選定、表彰。傾向など調査。

【結果・考察】全137作品の傾向分析、大きく精神面、作業面、環境面の3つの分類わけをし、結果、精神面に訴えかける作品は64.2%、作業面30.7% 環境面5.1%でした。やはり意識するのは「気持ち」に関わる部分が大きい様です。

優秀作品全社員の前で表彰され、その時にどのような気持ちで考えたのかを発表して頂きました。それにより職員の「気持ち」への理解が深まったように感じました。

優秀作品を使い、注意喚起の定着化への対策は、朝礼時に読み上げる事により、スタッフの意識の中に留める対策や、処方チェック時に適した標語は端末パソコン画面の上に掲示、散薬や水薬など調剤に慎重を期す状況に適した標語は調剤台に掲示、また監査台にも焦りや思い込みの注意喚起の標語を掲示、対策を行いました。標語は端的なので見たり聞いたりすることで、すぐ頭に入り意識の切り替えができると好評な意見が多かった。が一方、漫然と眺められているものにならないよう対策が今後の課題となります。

【キーワード】標語 定着化

日  
程特別  
記念  
講演特別  
講演プ  
ロ  
グ  
ラ  
ム共  
催  
セ  
ミ  
ナ  
ー分  
科  
会口  
頭  
発  
表ポ  
ス  
タ  
ー  
発  
表

## Stop & Start による高齢者への薬剤有害事象低減の取り組み

○柳田 憲司<sup>やなぎた けんじ</sup>

公益社団法人 京都保健会 京都協立病院

**【目的】** 2015年4月に日本老年医学会による Stop & Start ガイドライン(以下, GL)が公開された。当院でもポリファーマシー対策として, 院長より院内薬局に GL を基にした薬剤低減の取り組み要請があり, 担当薬剤師によって以下の介入が開始された。

**【方法】** 対象は新規入院患者。入院時の持参薬のうち GL でストップすべき薬剤について, その根拠やエビデンスレベル, 代替薬について担当薬剤師より主治医にメールで情報提供と注意喚起をする。退院までに, 主治医による対応がなされたかどうかをカルテ追跡し転帰をデータベースに記録した。

**【結果】** 開始時 2015年4月10日から 2016年6月30日まで。疑義照会実施件数は 153 件。うち, 主治医が対象薬剤を減量や中止, 血液検査追加, 他剤へ変更など何らかの対応をした総件数は 95 件(対応率 62.1%)であった。疑義を行った主な薬剤は酸化 Mg, H<sub>2</sub> 受容体拮抗薬, 向精神薬, NSAIDs, 過活動膀胱治療薬などであった。

**【考察】** GL が策定されたことを契機に, 当院でも高齢者への薬剤有害事象低減の取り組みへの一歩が踏み出された。まだまだ限られた事例ではあるが, これまでの 1 年 2 か月で約 150 件の介入事例があり, うち 6 割超の症例に何らかの主治医への介入成果が見られた。今後はこれらの取り組みを既存のシステムと連動させ, チーム活動へと昇華させること。また, 内容の質・量を継続・評価・検討することで, 包括的で効率的標準的な内容へと進化させ真のアウトカム達成(患者の安全向上)に目的を焦点化させることが課題。前提として薬剤師やチームが, 主治医と対等な関係で意見をできるように「この活動を支援していく」という医局の理解, 風土作りが重要だと考える。

**【キーワード】** ポリファーマシー

## 薬物乱用防止教室におけるプレ・ポストスコアを用いた開催成果の見える化

○迫 由加里<sup>さこ ゆかり</sup><sup>1)</sup>, 山本 恵里<sup>2)</sup>, 池田 悠人<sup>3)</sup>, 鮫島 栄花<sup>4)</sup>, 能澤 鈴佳<sup>5)</sup>, 石田 千尋<sup>6)</sup>, 磯野 元三<sup>7)</sup>, 井内 生子<sup>8)</sup>, 麻野 小百合<sup>9)</sup>

<sup>1)</sup>いるか薬局, <sup>2)</sup>いるか薬局実習生 大阪大谷大学薬学部, <sup>3)</sup>井内薬局実習生 摂南大学薬学部, <sup>4)</sup>イソノ薬局実習生 神戸学院大学薬学部, <sup>5)</sup>イソノ薬局実習生 近畿大学薬学部, <sup>6)</sup>うめ薬局実習生 摂南大学薬学部, <sup>7)</sup>イソノ薬局, <sup>8)</sup>井内薬局, <sup>9)</sup>うめ薬局

**【目的】** 薬物乱用防止教室の開催成果の見える化

**【方法】**

① 7月1日(金)放課後, 薬物乱用防止教室開催の告知ポスター7種を作製し掲示する  
ポスター作成者; 養護教諭2名, 薬学部大学5年生5人, 高校1年生保健委員13人

② 平成28年7月11日(月)府立松原高校で薬物乱用防止教室を開催

対象; 高校1年生250人

教材1; 「ダメ。ゼッタイ君」と「ダメ。くま君」の薬物乱用防止教室(保健所DVD)

教材2; 危険ドラッグ 買わない, 使わない, かかわらない(スライド府高薬 H28.3)

教材3; プレ・ポストアンケート(設問は以下のとおり 正解はすべていいえ)

1, 危険ドラッグや大麻などの薬物は, 一度だけの使用なら薬物乱用にならない

2, 危険ドラッグや大麻などの薬物は, 持っているだけなら罰せられない

3, 危険ドラッグや大麻などの薬物を使うのは, 個人の自由である

4, 危険ドラッグや大麻などの薬物を使用して, 死ぬことはない

5, 危険ドラッグや大麻などの薬物を使用しても意志が強ければやめられる

**【結果】** 教材1と教材2を使い, 45分間の薬物乱用防止教室を開催した。

薬物乱用防止教室の前後で行ったプレ・ポストアンケートの結果は, プレで間違いを選択した生徒は98人, ポストで間違いを選択した生徒は7人と大いに減少した。

**【考察】** 薬物乱用防止教室を開催する告知ポスターを作製・掲示することにより, 高校生から高校生に対する啓発活動ができた。さらに大学生から保健委員に対するの世代を超えた啓発活動があった。

プレアンケートの結果より, 3番と5番を間違えた生徒が多かった。ポストアンケートの結果から, 薬物乱用防止教室開催後にはこのような間違った認識をしている生徒は減少していた。薬物乱用防止教室の開催は, 薬物乱用に対して持っていた間違った認識が改められたと考えられる。

**【キーワード】** 薬物乱用防止教室

**P-25****学校薬剤師****学校における有毒植物誤食による食中毒事故発生を受けて**○<sup>ぬくい ひさし</sup>抜井 久司

有田薬剤師会 学校薬剤師部会 部会長

平成 28 年 5 月長野県のある小学校にて、学校敷地に生えていた有毒植物であるスイセンと、野草であり食用可能なノビルを誤食し、児童ら 11 人が嘔吐、吐き気などの食中毒症状訴えた事故がありました。幸い全員回復されたようですが、これを受けて当会が管内各学校に対して行ったこと、また、演者がある小学校に於いて行っているお薬教室の内容の一部を紹介し、今後こういった事故を未然に防ぐにはどうすればよいのかを考えてみました。

**P-26****学校薬剤師****小学生への「おくすり教室」の教育効果と課題**○<sup>はちけん ひろこ</sup>八軒 浩子, 伊藤 栄次, 中村 武夫

近畿大学 薬学部

**【目的】** 小学校学習指導要領（体育編）に記されている「健康で安全な生活を営む資質や能力を育てる」という目標は、セルフメディケーション教育の必要・重要性を示唆していると解される。子どもから大人まで、すべての国民が生涯を通じて自らの健康を適切に管理し改善していくためには、医薬品を正しく使用することができるようにならなければならない。そして学校教育現場はその重要な一翼を担っている。今回、小学生を対象に実施した「おくすり教室」に対する児童からのアンケート結果より、授業内容の評価を行い、若干の考察を試みた。

**【方法】** 小学校 3 年生の児童 4 クラス（計 116 名）を対象に各回 45 分、学校薬剤師による「おくすり教室」を実施した。学校薬剤師による講義だけでなく、児童が参加できるように配慮した内容とした。また授業の前後に生活習慣や医薬品の使用等に関する事前・事後アンケート（くすりの適正使用協議会作成）を実施した。

**【結果と考察】** 事前アンケートの結果、お茶やコーラで医薬品を服用したことがある児童が半数以上いた。医薬品に関する疑問点等を誰に聞けばよいか知っていると回答した児童は 80%であるが、身近な存在である学校の先生や保護者であるとの回答はそれぞれ約 10%および約 50%であった。授業内容については、95%が理解できたと回答し、「わからなかった」との回答はゼロであった。授業内容が役に立つかどうかについては、「とても役に立つと思う」との回答は 82%であったが、「役に立たないと思う」との回答が 3 件あった。医薬品の大型模型や空カプセルを用いた実験等の参加型授業には高い関心が得られた。単に授業が楽しかったという印象で終わることなく、健康で安全な生活を営むための医薬品の正しい使用について、さらに意識づけられ行動できるような方策が今後必要と思われる。

**【キーワード】** おくすり教室, 学校薬剤師, 教育効果日  
程特別  
記念  
講演特別  
講演プ  
ロ  
グ  
ラ  
ム共  
催  
セ  
ミ  
ナ  
ー分  
科  
会口  
頭  
発  
表ポ  
ス  
タ  
ー  
発  
表

## サルでもわかる環境衛生測定機器操作検査手順マニュアルのご紹介

○<sup>たはら こういち</sup>田原 宏一, 木曾 江律子, 隅田 重義

奈良県薬剤師会 学校薬剤師部会

【目的】学校保健安全法の施行により義務化された環境衛生測定機器の操作方法と、その検査手順について、出来るだけわかりやすいマニュアル化が出来ないかを検討した。学校薬剤師の環境衛生測定機器に対する習熟度にはバラツキがあり、機器の操作が得意な人ばかりではない。機器の扱いが苦手、操作方法がこれでいいのか悩むという声が多く、心理的な障壁を取り除きたいと考えた。マニュアル化に際しては「今日、学校薬剤師になった人でも、このマニュアルを見て検査すれば報告書が書ける」をコンセプトとして作成した。

【方法】マニュアル作成にあたり・イラストや写真を多用(機械への苦手意識の克服)・文字を大きく(老眼鏡なしでも見える大きさ)・手順番号を付与(書いてある順番にするだけ)を心がけた。

構成は 1) 測定を開始する前に 2) 機器の確認 3) 調査票への記入 4) 各機器の操作手順 5) 指導助言 6) 書類の提出 7) 機器の受け渡し。として作成したものをプリントアウトして、クリアファイル1冊にまとめた。

【結果】マニュアルを用いて環境衛生検査が滞りなく行われていることを確認した。

【考察】マニュアルの作成にあたっては、部会員からの意見や経験を元に改良を重ねた。

測定項目毎にA4用紙2枚分にまとめる事でクリアファイルを見開いたままで操作手順が読める様に工夫した。

操作手順だけに特化し、読むマニュアルから見るマニュアルを心がけた。

検査場所が偏らない様に、実施した場所の防備録を付けた。まだまだ改良の余地はある。今後も改良を重ね、誰もが使いやすいマニュアルの作成を目指したいと考える。

## 薬局実習を通して —調剤過誤を減らす棚配置の検討—

○<sup>かさほら</sup>笠原 ゆかり<sup>1)</sup>, 横田 弘<sup>2)</sup>, 高山 明<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>京都薬科大学, <sup>2)</sup>一条薬局

【目的】薬剤師は患者に安心、安全な医薬品を供給することを任務としている。その為調剤過誤防止に様々な工夫がされている。日本薬剤師会は調剤過誤の防止対策の1つとして医薬品の配置について取り上げている。今日、薬局実習において棚配置について考察する課題が与えられたのを機会に、調剤過誤の未然防止を目的とした棚配置について検討した。

【方法】平成28年5月9日から7月22日までの11週間の薬局実務実習中に調剤室の棚割りを作成した。

【結果・考察】医薬品の棚配列にはアイウエオ順・薬効別・薬用薬順・その他以上を組み合わせた配列がある。これらの配列の問題点として、①規格違い②メーカー違い③ジェネリック医薬品をどのように配列するのかが上げられる。また、慣れていない人にも分かりやすい棚配置や調剤過誤防止策・採用/削除の薬品・引き出しにしまう薬についても考慮して考えなければならない。これらのことを踏まえ、錠・カプセル剤は別々に配置した。また、アイウエオ順を基準とし、糖尿病薬等ハイリスク薬は区別して配置し、調剤過誤の防止と調剤効率が上がるようにしたいと考えた。ただし、棚配置については薬局によりスペースや棚の数、薬品数が異なるため、それぞれの薬局での工夫が必要と考えられる。

次に、実務実習においてこのような課題を遂行することで、頻繁に出ない薬についても意識できた。また、調剤過誤について考えることで、調剤する際に処方箋をよく確認するようになる、規格違いや名前が似ている薬も意識するようになった。「教えられるのではなく自分で考える課題」が与えられたことから、目を向ける範囲が広がり、参加型の実習を行うことができた。そして、物の見方についていつも「なぜ？」という視点を持ち続けることは薬剤師にとってとても大切だということ学びました。



P-29

薬学教育

### 改訂モデル・コアカリキュラム実習へのスムーズな移行を目指して

～代表的な8疾患に対するルーブリックの作成を通して～

○<sup>おき ひでゆき</sup>隠岐 英之, 渡邊 真樹, 植村 泰子, 射手矢 慎一, 大原 整

(一社) 滋賀県薬剤師会 薬学教育委員会

【目的】平成 31 年度からの実務実習では、「代表的な 8 疾患」が例示されたことにより、学生のパフォーマンスを具体的に評価し引き継ぐことが重要となった。

そこで、滋賀県薬剤師会では、指導者が現場で新しい評価に対応できるようにするために、病院薬剤師会と合同でアドバンスト WS を開催した。

今までの評定尺度による評価では、学生のパフォーマンスを評価できなかったため、昨年度も 8 疾患を想定したルーブリックを作成したが、あまりにも理想的な評価となり、現場では使いにくいものとなった。そこで今年度は、現場で指導薬剤師や他の薬剤師が学生の成長を感じることができるよう、具体的な患者像を共有化し、ルーブリックを作成した。

【方法】疾患ごとにグループに分かれ、実際の患者像を設定し、実習期間を 4 つに分け、それぞれの期間で学生に示してほしいパフォーマンスを設定した。

レベル 1 は 1～3 週目、レベル 2 は 4～6 週目、レベル 3 は 7～9 週目、レベル 4 は 10 週目～最終日とした。

実習終了後に指導者および学生にアンケート調査を行い、実習の質の向上が見られたかを検討した。

【結果】指導者からは、学生のモチベーションが維持でき、目標があることで取り組みやすくなったという意見や、学生からも、到達すべき目標がはっきりしたことで、積極的に取り組めたという意見が多くみられた。

【考察】作成したルーブリックはあくまでも机上のモデルであり、現場では当然そのまま使用することは難しい。しかしながら、学生の成長を段階的に確認し、指導者と学生と一緒に実習を行っていくという意識づけには非常に効果的であったと考える。

ルーブリックを作成することで、パフォーマンスを評価することに対する理解が深まれば、新しいカリキュラムでの実習へスムーズに移行できるのではないかと考える。

今後も県内の指導薬剤師に対しての周知を行っていきたい。

【キーワード】実務実習 パフォーマンス 代表的な 8 疾患 ルーブリック

P-30

薬学教育

### 「生命倫理」科目におけるアクティブラーニングの試み

○<sup>いとう さいじ</sup>伊藤 栄次, 中村 武夫

近畿大学薬学部

【目的】新薬学教育モデル・コアカリキュラムが 2015 年度入学生から適応された。A. 基本事項 (2) 薬剤師に求められる倫理観の GIO として「倫理的問題に配慮して主体的に行動するために、生命・医療に係る倫理観を身につけ、医療の担い手としての感性を養う。」と記されている。医療人として必要な倫理観を醸成することを目的に、アクティブラーニングの手法を用いた学習方法を試みた。

【方法】薬学部 2 年生 154 名を男女混合の 25 グループ (1 グループ 6 または 7 名) に分けた。チューターは教員 1 名で、各グループは進行係、発表係、記録係を決めてから、スモールグループディスカッション (SGD) を開始した。テーマとして、安楽死・尊厳死、セデーション、脳死、HIV/AIDS、薬害、人工妊娠中絶、出生前診断、同僚のミス、高齢者のケアなどを取り上げ、資料は SGD の 1 週間前に配付した。各グループで 30～45 分間 SGD を行って意見をまとめ、その後、発表した。受講者全員に各テーマに対するレポート提出を求め、その評価についてはルーブリック評価表を開示してから行った。また SGD 中は、発言の積極性やグループに対する貢献度等を評定尺度および自由記載による自己評価、学生同士の同僚評価を行った。

【結果および考察】チューター 1 名で、25 グループに分けて SGD を行ったが、スムーズに行われた。各テーマについて、自分で考える時間が持てたこと、他人の意見を聞くことで幅広く考えることができるようになったこと、他のグループの発表を聴くことで今まで気づかなかったことができたという自由記載が多く見られた。従来のシャワー型の学習方法では、いろんな課題について自分で考えることを避けてしまいがちであるが、今回用いた方法では、自分で考える機会が多くなり、倫理観を醸成する一助になったと思われる。

日  
程

特別  
記念講演

特別  
講演

プ  
ロ  
グ  
ラ  
ム

共  
催  
セ  
ミ  
ナ  
ー

分  
科  
会

口  
頭  
発  
表

ポ  
ス  
タ  
ー  
発  
表

## 薬局実務実習生による地域講演活動の実践

○古川 太津子<sup>1)</sup>, 中谷 有沙<sup>2)</sup>, 西川 直人<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup>五葉薬局, <sup>2)</sup>姫路獨協大学, <sup>3)</sup>神戸学院大学

【目的】当薬局実務実習生に地域での講演活動を体験させることにより、薬剤師としての心構えを身に付け、やりがいを感じてもらう。

【方法】地域の小学校6年生を対象に「薬の正しい使い方」「薬物乱用防止」について参加型体験授業を行う。

(授業までの流れ) 対象児童に授業前アンケートを行う。  
⇒授業前アンケート結果を踏まえて授業を準備する(スライド・紙芝居・グループワーク) ⇒担当教諭・養護教諭との打ち合わせ⇒授業⇒授業後アンケート⇒授業後アンケート結果から児童達の理解度をはかる。

【結果】講演活動を行った当薬局実務実習生達の感想を紹介する。

【考察】結果より、この活動は薬局実務実習生達のその後の実習や、実際に現場で働き始めた新人薬剤師達の服薬指導においても大いに役立っていることが分かる。

## かかりつけ薬局を決めている患者の「かかりつけ」への理解度に関する調査

○山口 雄治<sup>やまぐち ゆうじ</sup>, 岩出 賢太郎, 松浦 正佳, 下路 静佳

株式会社サエラ サエラ薬局

【目的】平成28年4月の調剤報酬改定より、患者の服用状況を一元的・継続的に把握して業務を実施する薬剤師の評価として「かかりつけ薬剤師指導料」および「かかりつけ薬剤師包括管理料」が新設された。「かかりつけ」が重要なキーワードとなり、かかりつけ薬剤師・薬局を持つことが推奨されているが、患者にとっては新たなキーワードであり、言葉の意味を十分に理解できていないことが予測される。そこで、患者が「かかりつけ」の意味をどの程度理解しているのか把握することを目的に調査を行った。

【方法】4月18日～4月28日の10日間にサエラ薬局に来局した全患者を対象に、アンケート調査を行った。調査項目は1.年齢, 2.性別, 3.かかりつけ薬局(薬剤師)を決めているか, 4.薬を受け取る薬局は(いつも同じ, 病院・クリニックの近く, 毎回違う薬局), 5.薬剤師の接客態度とした。アンケート調査について同意を得られた患者にアンケートへの回答を依頼した。

【結果】アンケートに回答した患者は8,174名で、有効回答数は7,093名(86.8%)でした。「3.かかりつけ薬局(薬剤師)を決めているか」について52.9%が「決めている」と回答した。その内いつも同じ薬局で薬を受け取ると回答したのは80.2%で、19.6%は病院・クリニックの近くと回答した。80歳代の女性患者で、かかりつけを決めているがいつも同じ薬局で薬をもらっていない割合が最も高く、続いて80歳代男性の患者であった。

【考察】かかりつけ薬局(薬剤師)を決めているのは5割の患者であり、今後、更なる「かかりつけ」の浸透が必要であると考えられる。また、そのうち2割は医療機関近くの薬局から薬を受け取っており、本来の目的である一元的な薬の管理を実施するためには、かかりつけ薬局(薬剤師)を持つことのメリットを患者に説明する必要があると考えられる。



P-33

薬局経営

### 新オペレーション導入に関する待ち時間短縮の検証と患者満足度調査

○相川 真紀子<sup>あいかわ まきこ</sup>, 森本 定則

ブリック薬局 新大阪店

【目的】薬局において、処方箋を受け取り患者様にお薬を渡し終えるまでの時間の短縮は永遠の課題である。処方内容によっては、患者様に確認したのち調剤開始する事がより効率的なオペレーションを遂行でき、結果として待ち時間の短縮になる事が想定された。当薬局では3月からこの運用を開始し、その前後で患者様待ち時間がどのように推移したかを検証した。さらにこのオペレーションに対し患者様が共感してくださっているかも今後の運用に関しての一つの大きなポイントであるため、運用開始後に患者様アンケートを実施した。この2つの観点から、このオペレーションを改善改良することで更なる業務フロー改善、患者様待ち時間短縮に結び付ける事象を開拓することを目的とした。

【方法】オペレーションの具体的方法は、①処方箋監査の際、前回と同じ処方内容でない場合を対象として、お待ち下さっている患者様に内容の確認を行った。急を要する薬品の場合やその場で使用する薬品の場合、説明に時間を要する薬品の場合は待ち時間を利用して患者様に薬の使用法のDVDやマニュアルを一読いただいたりした。一方で待ち時間の測定は当薬局で発行している受付番号札の発行時点から、投薬前の該当番号の画面表示までの時間を待ち時間とみなして検証した。

【結果】待ち時間については、オペレーション導入当初は、職員が不慣れな部分もあり、一時的に増加する結果となったが、徐々に導入前までの水準に改善している。また、患者様アンケートの結果、半数以上の方から、好評価が得られた。

【考察】新オペレーションは、概ね患者様に好印象を頂いた。この取り組みは「かかりつけ薬剤師」の推進にもつなげられると考え、今後さらなる質の向上を行っていきたい。また待ち時間をさらに短縮し、質的・量的な患者様満足度の向上をさらに上げていく所存である。

【キーワード】待ち時間、患者満足度、業務フロー改善、かかりつけ薬剤師

P-34

その他

### 先発医薬品から後発医薬品への変更によって患者が感じる両者間の差異の解消法：アムロジピンベシル酸塩 OD錠 5 mg

○稲永 勝昭<sup>いねなが まさあき</sup><sup>1)</sup>, 新屋 沙織<sup>2)</sup>, 坂梨 健太<sup>2)</sup>, 池田 浩人<sup>2)</sup>, 大波多 友規<sup>2)</sup>, 湯川 美穂<sup>2)</sup>, 湯川 栄二<sup>3)</sup>, 安藝 初美<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>ふれあい薬局 福岡大学 薬学部, <sup>2)</sup>福岡大学 薬学部,

<sup>3)</sup>ケミスト アンド ファーマシスト

【目的】本研究室が行った後発医薬品（後発品）に関するアンケート調査で、患者等の申し出で後発品から先発医薬品（先発品）へ再変更された事例中、アムロジピンベシル酸塩（AMBE）OD錠 5 mgについて“後発品の効果が不十分”という回答が数件あった。そこで、AMBE OD錠 5mgの先発および後発品のインタビューフォーム（IF）と製品画像から、溶出挙動、PTPシートデザイン、錠剤性状を比較し、患者が先発品からの変更に変和感を感じにくい後発品の探索を行った。

【方法】IFと製品画像の精査：先発および後発品のIFと製品画像をインターネットで入手した。溶出挙動の実験：JP16 溶出試験法に従い、AMBE OD錠 5mgの溶出試験を行った。

【結果】IFで標準製剤間で溶出挙動に差異がみられた。標準製剤である先発品2種の溶出試験を実際に行うと、溶出速度はノルバスク（N）>アムロジン（A）であった。IF中の溶出挙動でNと同じ挙動を示す“グループN”，Aと同等の挙動を示す“グループA”，それ以外の挙動を示す“グループM”に後発品を分類した。グループNの後発品の内、NとPTPシートデザインが類似するのは杏林であり、錠剤性状が類似するのはEMECとKNであった。一方、グループAに属する後発品の内、AとPTPシートデザインが類似するのはNSであり、錠剤性状が類似するのはTYKであった。

【考察】Nを服用していた患者が、溶出挙動が“グループA”に属する後発品に変更された場合、その溶出速度が低いため薬効発現が遅れ、効果不十分と感じる可能性は高い。故に、AMBE OD錠のように先発品間で溶出挙動が異なる場合、IFで同様の溶出挙動を示す後発品を選択すべきである。さらに、PTPシートデザイン、錠剤性状が類似する後発品への変更によって、患者が後発品に対して感じる差異の解消に努めることも必要である。

日程

特別記念講演

特別講演

プログラム

共催セミナー

分科会

口頭発表

ポスター発表

## 後発医薬品に関する啓発講演後のアンケート調査における市民意識

○<sup>ひろたに よしひこ</sup>廣谷 芳彦, 川村 仁美, 向井 淳治, 浦嶋 庸子, 池田 賢二, 名徳 倫明

大阪大谷大学薬学部

【目的】保険薬局は、後発医薬品（以下、後発品）の使用促進に大きな役割を果たしているが、平成28年度より後発品調剤体制加算の要件引き上げにより、保険薬局ではより一層の取組みが必要となっている。後発品の使用をさらに促進するには、市民への啓発活動が重要となる。

【方法】今回、市民フォーラムで後発品に関する講演会を開催し、終了後後発品に関するアンケート調査を同意を得られた参加者に実施した。

【結果】2回開催での参加者127名中105名より回答を得た。アンケート回答者は70才代が最も多く約半数であった。後発品の使用意図の質問では明確に意思を持たない参加者の割合が最も多かった。また、保険薬局などで後発品の使用を希望する参加者は少なかった。後発品について知りたいことと望むことは、共に安全性の向上と薬剤費の軽減であった。後発品の今後の使用予測として、大部分の参加者は「広まっていくべきである」と回答した。後発品の使用状況の回答から積極的群、中間群そして消極的群で分類すると、各群での年齢の割合は消極的群では40歳、50歳代の割合が多く、中間群では60歳代が多くなり、積極的群では70歳代が最も多くなる傾向が見られた。「後発品に対して知りたいこと」では、積極的群は「有効性・安全性」「同成分が他にあるか」、中間群は「後発品があるか」「いくら安くなるか」「適応症」、消極的群は「製薬会社」「特になし」であった。「後発品に希望すること」では、積極的群は「さらに安く」「効果」「品質」、中間群は「手軽に」、消極的群は「安全性」の各質問項目と関連が強かった。

【考察】各群により後発品に対する意識が異なるため、その啓発活動時での説明にも工夫が必要である。今回の講演で薬剤費の軽減だけでなく、医療費の削減になり社会貢献になることを伝えたため、後発品が今後「広まっていくべきである」との回答が多く見られたため、今後も市民啓発活動が必要である。

## 在宅にかかる業務をどう改善していくか？ その取り組みと検証。

○<sup>にしやま ようへい</sup>西山 陽平<sup>1)</sup>, 桐子 雄志<sup>2)</sup>, 増田 康剛<sup>3)</sup>, 田中 健太<sup>1)</sup>, 瀧 杏奈<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>株式会社ジャパンファーマシー えがおDe薬局 長岡京店,

<sup>2)</sup>株式会社ジャパンファーマシー 大原野店, <sup>3)</sup>株式会社ジャパンファーマシー 府庁前店

【目的】急激な少子高齢化が進む我が国では、高齢者の生活を支援するために医療と介護の連携が重要となる。そのような状況を踏まえ、地域包括ケアシステム構築を目指して薬局薬剤師は在宅医療への積極的な参画が求められている。私が管理薬剤師として1年前に着任した長岡京店は居宅対応患者数に対して受け持つ施設の数が多い事が特徴で、実際に業務を行う中で多々問題があった。例えば、配薬業務についてスタッフ全員で情報共有できていないことや、薬歴の記載に時間がかかること、臨時処方等の配薬タイミングが挙げられる。上記の問題点を改善するためルールを作成し、業務効率を上げる取り組みを続けている。

【方法】情報共有を可能とするチェックシートを作成し、運用を重ねながら改善していった。薬歴の記載に時間がかかることに対して、電子薬歴メーカーと相談し薬歴・報告書フォームの修正を行った。また、記載方法を一から見直し効率的なフォームを作成していった。

【結果】情報を明確に見える化することで情報共有が可能になった。配薬もれを防止し、準備を予定通りに行える等業務効率を改善することができた。また、薬歴・報告書のフォームを作成、連動することで薬歴、報告書作成までの時間が短縮できた。

【考察】この取り組みにより、スタッフ全員で業務を共有できるようになった。ミス数を減らし業務にかかる時間を短縮でき有効であったと感じている。基本的なことではあるが、このような試行錯誤の繰り返しはスタッフの成長に寄与しており、在宅に関わる薬剤師を育てていく上でも重要な要素であると感じた。このスタイルを継続し、本学術大会での評価を更なる改善に繋げ、やがては会社内の在宅業務に貢献できるようになっていきたい。また、業務の改善だけではなく多職種との連携も重要である。連携を構築するためのコミュニケーション能力習得も、この店舗で取り組んでいきたいと考えている。